

# 続 櫻の木の下で (32)

阿木津 英



歌が、いちじるしく過去をうしなつて来ている。三十年來そんな傾向は続いているのだが、この二、三年ほどは肌身にしてみても感じる。作歌する人たちが、過去に自分を接続しようとする志向を持っていない。

せいぜい前衛短歌あたりくらいまでにしか関心が無い。しかし、思い出すのだが、塚本邦雄ほど古典を渉獵した人はなかった。たんに知識があるというのではなく、自分の歌を古典のある脈に接続しようとする意志が見えていた。岡井隆だつてそうだ。岡井の同時代に対する関心はひろかつたけれど、それでも最後までアララギの血脈には一筋根ざしていた。

過去をうしなつたものが、どんなにみじめか。うすつべらなものになるか。それを感受する器官すらすでに具えていないらしく見える。これまで感受する器官を具えていた者もい

ちじるしく退化させはじめているらしく見える。

\*

そんなことを思っているところに、オルテガ・イ・ガセツト著『大衆の反逆』の新訳が岩波文庫から出たというので、さつそく買って読んだ。これはスペインで一九三〇年に刊行され、たちまち英語・仏語に翻訳、日本にも紹介された名著だから、読んだ方も多いだろう。わたしは、一九九〇年代に白水社から出た桑名一博訳で読んだ。

こちらの解説は久野収が書いていて、オルテガの本書に「重大な異論」があると、次のように記す。

(略) オルテガは「大衆」人間を一つの社会階層でないといいながら、それでも、あまりに実体的に捉えすぎる結果、この「大衆」人間の克服方法を、世襲できない、新しい貴族とその英雄主義、貴族主義の新しい誕生と強化に求めている。

これは、近代革命に挫折したローマン主義が革命以前の時代によせるあこがれであり、それにふたたび幻滅する歴史過程を繰り返すことにならないか、というのである。

十九世紀の自由主義的デモクラシーと恐るべき科学技術の進歩がヨーロッパに「大衆」を輩出したとオルテガは言い、その「大衆」の相貌を本書は苦々しく描き出すのだが、それ

は近代の価値を否定する保守反動にならないかというのだろう。スペイン思想研究者佐々木孝は、オルテガの真意はそういうところにはないと、改めての翻訳を決意したという。

\*

芸術とはすなわち保持することであると、玉城徹はどこかに書いているが、わたしもまたそういう一種の保守志向をもった人間である。古いものや、老いたものの良さを知る者であり、自らを歴史から切断することを厭う者である。

エリオットに感化を受けた玉城徹は、珊瑚樹のようなものを思い描く。幹の方ではほとんど石化しているが、幾つもの枝分かれがあり、その尖端は生命を保っている。これが伝統であり、文化であり、歴史というものの総体である。

尖端に生を受けて自らの身を切断していくものもあるうけれど、わたしはむしろそこに充分に定着したい。なぜかと言えば、尖端の生命活動は石化した過去からの養分によって支えられているが、このわが生命活動によって溶かされた些少の養分がこの上もなく味わい深いからである。

\*

白水社から出た桑名「博識では「大衆」「大衆人」と訳するところを、佐々木孝は「大衆化した人間」と訳する。それによって、ノーベル賞をとった科学者だって、博覧強記の知識人だって、血筋のよい世襲政治家だって、スマホを握りしめているそのらの無知な大衆と同じく、誰もが「大衆化した

人間」へと変貌し得る、という含みをもつ。

内容はすっかり忘れていたので、初めて読むような気持ちで読んだが、さまざまな角度からオルテガが描き出す「大衆化した人間」の相貌を読むうちに、今の歌壇のあれこれの現象を思い浮かべて、苦笑せざるを得なかった。

むしろ現代の特徴は、凡俗な魂が、自らを凡俗であると認めながらも、その凡俗であることの権利を大胆に主張し、それを相手かまわず押しつけることにある。(傍点は原文)

作歌を始めた二十代の頃は、「通俗」「俗っぽい」と言われると痛棒をくらったような気がしたのだが、八〇年代に入った頃から「俗で何がわるい」という反発の空気が勢いを得はじめた。以後、そういう歌評が通用しなくなった。

「大衆化した人間」は、「凡俗」の権利を主張して、自らを疑わない。「おのれの愚かさに居直っているので、羨ましいほど落ち着きはらっている」。「高貴な人間は本当に自分が完全であると感じることはできない」ものだが、自己閉塞し、知的に閉塞した「大衆化した人間」は、「たまたま自分の内部に溜まった一連の決まり文句、偏見、観念の切れっ端」などを後生大事に、「天真爛漫としか説明しようのない大胆さをもってそれらを相手かまわず押し付けてくる」。

あれこれの顔貌が見えるかのようで、苦笑しないではいら

れない。

現代は「風潮の空気に引きずられるまま」の時代である。芸術や思想、あるいは政治や社会的慣習の中で形成される皮層的な動揺に対して、ほとんど誰も抵抗しようとはしない。だからこそ、どの時代よりも修辞学が幅を利かす。

この指摘には、ああそうだったか、と頷いた。「大衆化した人間は、自分の宿命である不動の堅固な大地の上に足場を固めることをしない」。産みつけられた場所に根を下ろせない。「大衆化した人間」とは、おのれの歴史を空にした人間であり、過去という内蔵を持たない。だからグローバリストであり、「いわゆる市場の偶像（註は略）によって組成された人間の殻にすぎない」。

過去という内蔵をもたないから、自由に浮遊できるのである。どこで何が起こっても「風潮の空気に引きずられるまま」、誰も抵抗しようとはしない。そういうところでは修辞学が幅をきかす。そう言つて、オルテガは続ける。「シュルレアリストは、他の人たちが「ジャスミン、白鳥、そしてファウヌス」「ローマ神話で林野・牧畜の神」と書いた場所に、特に書く必要のない言葉を書いて全文学史を超えたと信じた」。しかし、それは「それまでごみ溜めにうち捨てられていた別の修辞学を引き出」したにすぎない。

\*

オルテガがこの書を執筆した一九二〇年代、数年前から奇妙なことが起こり始めた、という。「サンデイカリズムやファシズムの相の下に（註は略）、ヨーロッパに初めて、おのが行為の理由を相手に示すことも、また自己正当化も望まない人間、むしろ単純明快に断固として自分の意見を押し付けようとするタイプの人間が現れたのだ」。（傍点は原文）

現今の政治状況下、傍点部を読んで身に痛く感じられないか。この『大衆の反逆』が英訳され、仏訳された一九三〇年代、日本では滝川事件や、天皇機関説不敬罪事件や、矢内原忠雄教授の東大追放などがつぎつぎに起きた。

しかし、何より深刻なのは、この政治権力を握った「大衆化した人間」に絶大なる拍手をおくるのが、ごみ溜めから拾い出してきた修辞学を誇らしげに身にまとう、過去という内蔵をもたない、「風潮の空気に引きずられるまま」のわれわれであり、その準備はもうととのついているということだ。

\*

オルテガは、「大衆化した人間」に「高貴な人間」を対置したが、わたしの見るところ、高貴も何も、要するに人類が長い間に培ってきた善きものを保持しようと努め、人間としての当然のモラルを備えようというにすぎない。自らの卑小さを知り、増上慢をあらため、過去を咀嚼し学ぶ、そういう当たり前のことを生の規範とするだけのことなのだ。